

タンザニア

## 住友化学

（防虫効果のある蚊帳の生産・販売）

## 折り紙でモノづくりの基礎を伝授

WHO（世界保健機関）によると、2010年の世界でのマラリアの感染数は2億1900万人で、66万人もの死者が出ている。その約9割が、アフリカに住む子供だ。

マラリアは蚊を媒介して感染する。そのため蚊帳が一般家庭でも使われる。ただ、表面に塗られた殺虫剤が落ちて効果が長持ちしなかったり、最近では中国製の劣悪な蚊帳が出回ったりするなどの問題がある。

住友化学は糸に防虫成分を染み込ませることで防虫効果が5年以上持続する蚊帳を開発、アフリカ各国に投入している。「オリセットネット」と呼ばれる蚊帳は、1998年にWHOから認定を受けたことで、アフリカでの需要が一気に高まった。

もちろん壁はあった。1つが、タンザニアでの現地生産の立ち上げだ。住友化学は2007年、それまで無償で技術供与していた現地のパートナー企業と合弁企業を設立し、オリセットネットの現地生産に踏み切

った。それまでは、住友化学は中国などで生産した蚊帳をアフリカに持ち込んでいた。製品のコストを下げ、さらに現地に事業を根付かせるために現地生産に切り替えたのだ。

生産地は政治が安定しているタンザニアに決定した。ただ、モノづくりのインフラはほとんどないに等しい。電気や水道はなんとかなるが、人材の育成こそがカギだった。

昨年までアフリカの事業を陣頭指揮した元住友化学ベクターコントロール事業部長で、現在は非政府組織のマラリア・ノーモア・ジャパンの専務理事となった水野達男氏は「最初は生産性が中国の半分程度。ロス率が高く、中国から輸入したほうが安くいられた」と話す。

タンザニアには大規模な生産工場はほとんど存在しない。従って、工場で新たに採用した20歳前後の従業員のほとんどにモノづくりの経験はない。「自分が担当する作業を確実に終え、ラインの次の作業者に渡す」

という、製造業の基本的な考え方を理解してもらうために時間がかかった。また、文字や計算といった基礎についても理解度にばらつきがあるため、マニュアル化するのも簡単ではない。日本人の技術者が通訳を介して身振り手振りで作業を教えていくしかなかった。

役に立ったのが「折り紙」だった。決められた順序できちんと折っていくと、きれいな折り鶴が完成する。しかし、少しでも角がずれていたら、折るたびにずれが大きくなって、途端に鶴の見栄えが悪くなる。簡単なようで難しい折り紙を通じて、各工程での品質の大切さを教えた。

採用方法でも工夫した。タンザニアには同じ国でも様々な部族が存在し、それぞれ特徴が違う。モノづくりの得意な部族を多く採用したのだ。それらの部族が住む地域は工場から遠いこともある。そこで、出稼ぎ労働者が集団生活を営む寮も建設した。工場の従業員数は当初の1000人規模から7000人にまで拡大した。住友化学のオリセットネットはタンザニアなどの政府から直接受注するだけでなく、今ではケニアなど一部の国では市販も進んでいる。

製造業が難しいアフリカでもモノづくりが可能であるということ、住友化学のケースは示している。

## TANZANIA

住友化学がタンザニアで現地企業と合弁出資で立ち上げた蚊帳の工場

